

貯法：室温保存

有効期間：3年

承認番号 21900AMX01208

販売開始 1994年7月

アレルギー性疾患治療剤

ケトチフェンフマル酸塩カプセル

ケトチフェンカプセル1mg 「NIG」

Ketotifen Capsules

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2.2 てんかん又はその既往歴のある患者 [9.1.1 参照]

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	ケトチフェンカプセル1mg 「NIG」
有効成分	1カプセル中：ケトチフェンフマル酸塩 1.38mg (ケトチフェンとして1mg)
添加剤	タルク、トウモロコシデンプン、乳糖水和物、ヒドロキシプロピルセルロース (カプセル本体) 酸化チタン、ゼラチン、ラウリル硫酸ナトリウム

3.2 製剤の性状

販売名	ケトチフェンカプセル1mg 「NIG」
色・剤形	蓋部・胴体部とも白色不透明、内容物が白色～淡黄白色粉末のカプセル剤
外形	 4号カプセル
質量	160mg
識別コード (PTP)	t KTF 1mg

4. 効能又は効果

- 気管支喘息
- アレルギー性鼻炎
- 湿疹・皮膚炎、蕁麻疹、皮膚痒症

6. 用法及び用量

通常、成人にはケトチフェンとして1回1mg（1カプセル）を1日2回、朝食後及び就寝前に経口投与する。
なお、年齢・症状により適宜増減する。

8. 重要な基本的注意

〈効能共通〉

8.1 眠気を催すことがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械の操作には従事させないよう十分注意すること。

〈気管支喘息〉

8.2 本剤はすでに起こっている発作を速やかに軽減する薬剤ではないので、このことを患者に十分説明しておく必要がある。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 てんかんを除く痙攣性疾患、又はこれらの既往歴のある患者
痙攣閾値を低下させることがある。[2.2 参照]

9.1.2 長期ステロイド療法を受けている患者

本剤投与によりステロイドの減量をはかる場合は十分な管理下で徐々に行うこと。

9.3 肝機能障害患者

肝機能障害患者を対象とした臨床試験は実施していない。

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。

9.7 小児等

乳児、幼児に投与する場合には、観察を十分に行い慎重に投与すること。痙攣、興奮等の中枢神経症状があらわれることがある。[11.1 参照]

9.8 高齢者

減量するなど注意すること。一般的に生理機能が低下している。

10. 相互作用

10.2 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
中枢神経抑制剤 (鎮静剤、催眠剤等) 抗ヒスタミン剤 アルコール	眠気、精神運動機能低下等を起こすことがある。 アルコール性飲料の摂取を制限すること。	いずれも中枢神経抑制作用を有するため。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなどの適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 痙攣、興奮（頻度不明）

乳児、幼児では特に注意すること。[9.7 参照]

11.1.2 肝機能障害、黄疸（頻度不明）

AST、ALT、ALP、LDH、 γ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがある。

11.2 その他の副作用

	0.1%～5%未満	0.1%未満	頻度不明
泌尿器	—	—	頻尿、排尿痛、血尿、残尿感等の膀胱炎様症状
過敏症	—	発疹、蕁麻疹	浮腫、多形紅斑
精神神経系	眠気、けん怠感、口渇	めまい、ふらつき、頭痛、味覚異常、しびれ感	一過性の意識消失、易刺激性、不眠、神経過敏、鎮静
消化器	—	悪心、腹痛、下痢、嘔吐、胃部不快感、食欲不振、便秘、口内炎	—
肝臓	—	AST、ALT、ALPの上昇	LDH、 γ -GTPの上昇
その他	—	体重増加、鼻出血	ほてり、動悸、月経異常

12. 臨床検査結果に及ぼす影響

本剤は、アレルギー性皮膚内反応を抑制するため、アレルギー性皮膚内反応検査を実施する3～5日前より本剤の投与を中止することが望ましい¹⁾。

13. 過量投与

13.1 徴候、症状

傾眠、見当識障害、チアノーゼ、呼吸困難、発熱、錯乱、痙攣、頻脈、徐脈、低血圧、眼振、可逆性昏睡等。特に小児では、興奮性亢進、痙攣²⁾。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔を起こして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 単回投与

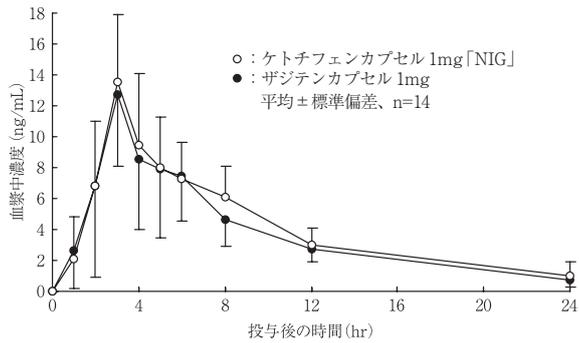
健康成人にケトチフェンカプセル2カプセル（ケトチフェンとして2mg）^{注）}を1回経口投与した場合の薬物動態は次のとおりである³⁾。

Tmax (h)	Cmax (ng/mL)	AUC ₀₋₂₄ (ng・h/mL)	T _{1/2β} (h)
2.8±0.2	5.13±0.63	54.62±8.36	6.72±0.70

平均±標準誤差 (n=5)

16.1.2 生物学的同等性試験

ケトチフェンカプセル1mg「NIG」とザジテンカプセル1mgを、クロスオーバー法によりそれぞれ2カプセル [ケトチフェンマール酸塩として2.76mg (ケトチフェンとして2mg)] 健康成人男子に単回経口投与して血漿中ケトチフェン濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ (AUC、Cmax) について統計解析を行った結果、両剤の生物学的同等性が確認された⁴⁾。



薬物動態パラメータ

	投与量 (mg)	AUC ₀₋₂₄ (ng·hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	T _{1/2} (hr)
ケトチフェンカプセル1mg「NIG」	2	99.2±17.5	16.4±2.7	3.4±1.1	6.7±2.3
ザジテンカプセル1mg	2	90.4±16.4	16.0±3.1	3.4±0.8	6.5±3.6

(平均±標準偏差, n=14)

血漿中濃度並びにAUC、Cmax等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

16.3 分布

ケトチフェンの蛋白結合率は約75%である³⁾ (*in vitro*、ヒト血清、平衡透析法)。

16.4 代謝

ケトチフェンの血中及び尿中における主代謝産物はグルクロン酸抱合体であり、脱メチル化体及びN-酸化化体がわずかにみられた^{3) 5)} (外国人のデータ)。

16.5 排泄

健康成人に¹⁴C-ケトチフェンを単回投与した時、投与120時間後までに放射能は尿中に71.1%及び糞中に26.4%排泄された³⁾ (外国人のデータ)。

注) 本剤の承認された通常成人1回用量は1mgである。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

ケトチフェンはケミカルメディエーター遊離抑制に基づく抗アナフィラキシー作用及び抗ヒスタミン作用を有し、かつ、気道及び鼻粘膜等の組織の過敏性を減弱させる。更に、PAF (血小板活性化因子) による気道の反応性亢進を抑制し、好酸球に対する作用を有する。

18.2 抗アナフィラキシー作用

ケトチフェンはPCA (受動的皮膚アナフィラキシー) 反応、実験的気管支喘息モデルにおけるアナフィラキシー反応を抑制する⁶⁾ (ラット)。

ヒスタミン及びSRS-A等ケミカルメディエーターの遊離を抑制する (ラット腹腔・皮膚肥満細胞^{6) 7)}、ヒト白血球中好塩基球・好中球^{8) 9)}、ヒト肺¹⁰⁾ *in vitro*)。また、抗SRS-A作用を有する^{9) 10)} (モルモット気管支筋*in vivo*、回腸*in vitro*)。

18.3 抗ヒスタミン作用

ケトチフェンはヒスタミンによる気管支収縮 (モルモット)、血管透過性亢進、皮膚反応 (ラット) 等を抑制する⁶⁾。

18.4 PAF (血小板活性化因子) による気道反応の抑制

ケトチフェンはPAFによる気管支収縮、気道反応性亢進を抑制する^{11) 12)} (モルモット)。

18.5 好酸球に対する作用

PAFによる好酸球の肺への集積を防止する (モルモット¹²⁾、ヒト¹³⁾)。

アレルギー性疾患患者においてケトチフェンは抗原刺激による好酸球の脱顆粒を防止する¹⁴⁾ (*in vitro*)。

ケトチフェンはアレルギー性疾患患者の末梢血好酸球を減少させる^{15) 17)}。

また、臨床症状の改善に伴って低比重好酸球比率の減少がみられる¹⁵⁾。

18.6 誘発試験による過敏反応の抑制

アレルギー性疾患患者において、ケトチフェンは抗原誘発による気道、鼻粘膜、皮膚等の過敏反応を抑制する^{18) 22)}。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称: ケトチフェンマール酸塩 (Ketotifen Fumarate)

化学名: 4-(1-Methylpiperidin-4-ylidene)-4H-benzo [4,5] cyclohepta [1,2-b] thiophen-10 (9H) -one monofumarate

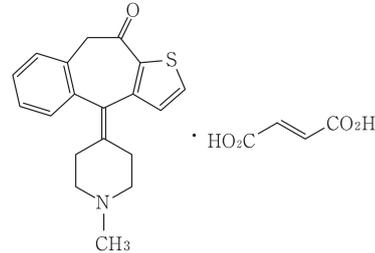
分子式: C₁₉H₁₉NOS · C₄H₄O₄

分子量: 425.50

融点: 約190°C (分解)

性状: 白色～淡黄白色の結晶性の粉末である。メタノール又は酢酸 (100) にやや溶けにくく、水、エタノール (99.5) 又は無水酢酸に溶けにくい。

化学構造式:



22. 包装

100カプセル [10カプセル (PTP) × 10]

23. 主要文献

- 1) Debelic, M. et al.: Dtsch. med. Wschr., 1981, 106 (50), 1704-1707
- 2) Le Blaye, I. et al.: Drug Safety, 1992, 7 (5), 387-392
- 3) 第十八改正日本薬局方 医薬品情報 JPDI2021.じほう: 2021: 255-256
- 4) 社内資料: 生物学的同等性試験
- 5) Kennedy, G. R.: Res. Clin. Forums, 1982, 4 (1), 17-20
- 6) Martin, U. et al.: Arzneim.-Forsch. Drug Res., 1978, 28 (5), 770-782
- 7) 赤星吉徳ほか: アレルギーの臨床, 1985, 5 (5), 401-404
- 8) 熊谷 朗ほか: メディカルサンド, 1980, 8 (2), 87-93
- 9) 岸本真知子ほか: アレルギーの臨床, 1984, 4 (2), 149-151
- 10) Ney, U. M. et al.: Res. Clin. Forums, 1982, 4 (1), 9-16
- 11) Mazzoni, L. et al.: Br. J. Pharmacol., 1985, 86 (S), 571
- 12) Morley, J. et al.: Agents. Actions., 1988, 23 (S), 187-194
- 13) Arnoux, B. et al.: Am. Rev. Respir. Dis., 1988, 137 (4), 855-860
- 14) Podleski, W. K. et al.: Agents. Actions., 1984, 15 (3-4), 177-181
- 15) 宮里 稔ほか: 炎症, 1988, 8 (3), 260-262
- 16) 笹本明義ほか: 小児科臨床, 1986, 39 (11), 3275-3281
- 17) 碓 久雄ほか: 小児科臨床, 1989, 42 (3), 589-600
- 18) 伊藤和彦ほか: 薬理と治療, 1980, 8 (2), 563-567
- 19) 山田政功ほか: アレルギーの臨床, 1984, 4 (2), 137-140
- 20) 白井信郎ほか: 耳鼻咽喉科展望, 1984, 27 (S1), 107-114
- 21) 田中憲雄ほか: 臨床と研究, 1980, 57 (8), 2712-2717
- 22) Giesen, H. K. et al.: Med. Welt, 1979, 30 (37), 1359-1360

24. 文献請求先及び問い合わせ先

日医工株式会社 お客様サポートセンター
〒930-8583 富山市総曲輪1丁目6番21
TEL (0120) 517-215
FAX (076) 442-8948

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

 **日医工岐阜工場株式会社**
NICHIKO 富山市総曲輪1丁目6番21

26.2 発売元

 **日医工株式会社**
NICHIKO 富山市総曲輪1丁目6番21

26.3 販売

武田薬品工業株式会社
大阪市中央区道修町四丁目1番1号